



古代の白砂青松と飼飯の海人 : 「慶野松原」

坂江, 渉

(Citation)

「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観:17-25

(Issue Date)

2025-02

(Resource Type)

book part

(Version)

Version of Record

(Rights)

当該論文は兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室の許諾を得て公開しているものです。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493744>



古代の白砂青松の浜辺と飼飯^{けひ}の海人 ―「慶野松原」―

坂江 渉

はじめに

古代の淡路島の沿岸部には、倭王権への舟運力・水軍兵力の提供、天皇に海産物・清浄水（井水）などを貢納する役割を担った海人（海部）が点在していた。そのなかでとくに有力だったのは、津名郡の「野島の海人」（現在の淡路市野島墓浦辺り）と三原郡の「阿万郷の海人」（現在の南あわじ市西阿万町付近）である。これらの海人については、しばしば古代の出土資料や文献史料に登場している（平城宮出土木簡、『日本書紀』応神 22 年 3 月条、仁徳即位前紀など）。

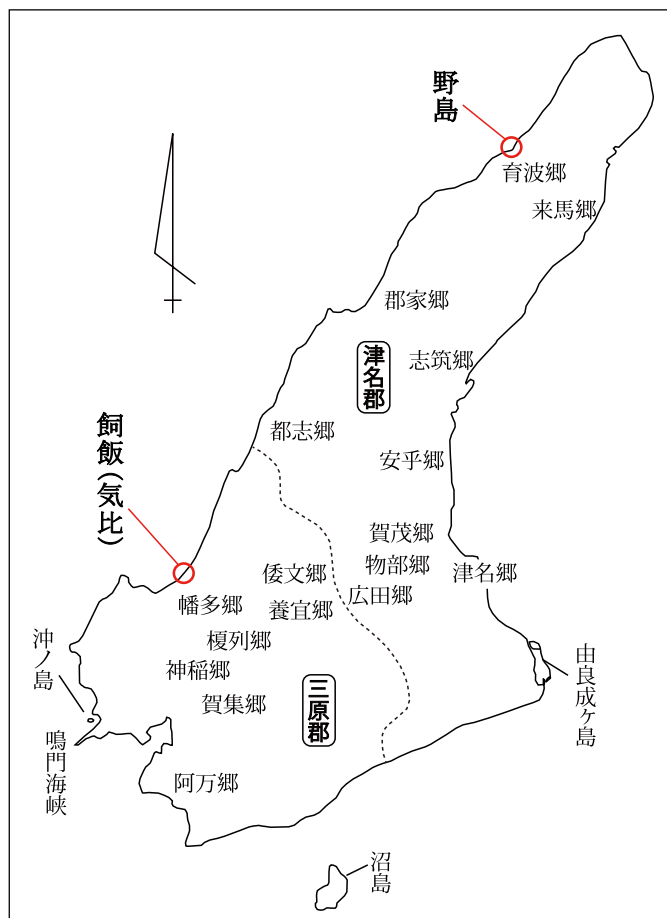


図1 淡路国の郷の推定地（『東浦町史』にもとづく）

このうち三原郡内の海人については、現在の三原川河口部の「慶野松原」あたりにも居住していた。それが『万葉集』の柿本人麻呂の歌にみえる「飼飯（氣比）の海人」である（図1参照）。人麻呂は「飼飯の海庭良くあらし刈り薦の乱れ出づ見ゆ海人の釣り船」（巻3-256、新日本古典文学大系。以下も同じ）と歌い、良い漁場をかかえた飼飯の海人の舟が出漁する姿を詠んでいる。なお現在の慶野松原の「慶」が、この「ケヒ」の地名に因むことはいうまでもない。

これまで飼飯の海人に関しては、史料が僅少であるので、まともな扱った考察はほとんどなかった。しかしここには三原川からの大量の流砂、「鳴門の渦潮」を生みだす沿岸部の強い潮流、および潮の海面変動などによって形成された、3列の砂堆（砂嘴・砂丘）があった。

これらの砂堆は、本稿が対象とする6・7世紀以降にはすでにあつたとみられる。それぞれの形成時期は、内列砂堆が縄文時代中期頃、中列砂堆が弥生時代後期頃、外列砂堆が古墳時代の「小海退」（海岸線が海側に後退する現象）に関連づけて理解されている⁽¹⁾。このうち内列砂堆の先端部の現状と、「分間絵図」での描かれ方については、本報告書の口絵12～14を参照していただきたい。

よく知られるように、こうした砂堆の内側はラグーン状の干潟になっており、古代には

外海からの風波を遮れる「天然の良港」になることが多かった。3つの砂堆に挟まれる飼飯の干潟も、海人の舟の停泊地として、また彼らの出漁・出航時のミナトとして利用されていたはずである。『延喜式』巻9の神名帳にみえる、三原郡内の式内社「湊口神社」の存在もそれを裏づける。飼飯の海人たちが、このミナトを拠点に活動していたことはほぼ確実である。

本稿ではこの飼飯の海人に焦点をしばり、まずその居住地近くの自然環境のうち、慶野松原の白砂青松の浜辺が、彼らにとってどのような土地であったかを考える。ついで『万葉集』や六国史の記事などを素材にして、飼飯の海人が倭王権によってどのように編成される集団であったかを検討したい。

なお現在「国の名勝」に指定される慶野松原の景色は、近世の徳島藩による松林の育成以降のものだと考えられる。しかし「入れ子」状態で発見された、弥生時代の7点の「松帆銅鐸」内の砂礫の花粉分析によると、マツ属の花粉がかなり見つまっている⁽²⁾。古代の景観は、近世以降のそれには及ばないが、パイオニア植物といわれる松林が3つの砂堆上にある程度展開していたと考えられる。このような見通しのもと、上記の課題に迫ってみる。

1. 古代の白砂青松の浜辺 - 見る・祭る・遊ぶ -

(1) 「見る」対象

『万葉集』のなかには、「見れども飽かぬ」「見まく欲し」などの定型句をともし、各地の自然景観の美しさを賞讃する歌がたくさん収められている。その対象になったのは、山・川・滝などのほか、「松原」「浜」「干潟」「島」などの海辺の風景が圧倒的に多い。

たとえば、「霰打つ 安良礼松原 住吉の弟日娘と 見れども飽かぬかも」（巻1-65。慶雲3年<706>文武天皇の難波行幸時の長皇子の歌）、「我が妹子に 猪名野は見せつ 名次山 角松原 いつか示さむ」（巻3-279。高市黒人）、「…三穂の岩屋は 見れども飽かぬかも」（巻3-307。博通法師。三穂の岩屋は紀伊国の海辺の洞窟）、「難波潟 潮干の名残り 飽くまでに 人の見ゆ児を 我し共しも」（巻4-533。大伴宿奈麻呂）、「…飽き足らめやも 白波の い咲き廻れる 住吉の浜」（巻6-931。神亀元年<725>聖武天皇の難波行幸時の車持千年の歌）、「玉津島 見れども飽かず いかにして 包み持ち行かむ 見ぬ人のため」（巻7-1222。作者不明）などがそれである。

このように「安良礼松原」「角松原」などの浜辺の光景は、古代貴族らがいくら眺めても、「見飽きぬ」対象として尊ばれていた。また同時にこれらの歌のなかに、天皇による「国見」行幸時のものが含まれる点も注目される。

これに関連して、角麻呂の作とされる巻3-295の歌では、「住吉の 野木の松原 遠つ神 我が大君の 幸行処」と詠まれている。この歌は699年の文武天皇の難波行幸時のものと理解されており（新編日本文学全集『万葉集』1、189頁頭註）、当時の行幸に際しては、白砂青松の浜辺が、天皇自身の国見の対象になっていたことがわかる。おそらく「住吉の野木の松原」は、文武天皇による「国誉め」の主題になったと思われる。

こうした松原・干潟の勝景や、花・青葉・白鳥・水鳥などを「見る」ことは、古代びとにとって単なる風光の観賞ではなかった。それは生命・霊魂に関わるものであった。霊力に溢れ

るモノを見ることは、その力を吸収し自らの生命力を強化する、「タマフリ」（感染呪術）の効果をもった。しかもそれは儀礼化していたと説かれる⁽³⁾。松原などを「見る」のは、このようなねらいがあったと考えられる。白い砂浜上につづく緑豊かな松林の光景は、今でもそうであるように、人びとに安らぎを与えたのであろう。

ただし『万葉集』などにおいて、現在の慶野松原の浜辺で、このような「見る」儀礼がおこなわれていた痕跡はまったくない。また天皇による国見行幸の史料も残らない。しかし現存する各国『風土記』の地名起源説話には、各地の族長による「国形」を見る儀礼が実施されたことを示唆する話を見いだせる⁽⁴⁾。おそらく古代の当地でも、海人の族長層などによる国見がおこなわれていたと想定される。

時代は江戸時代にまで降るが、徳島藩主が領国内の淡路各地を巡見した土地を写実風に描いた、文化14年（1817）、徳島藩士・大溝熊吉筆の『淡州御道筋処々真景』という絵図（卷子。20×200cm）がある。その場面の1つとして、「慶野御所松原」の松林が描かれ、松林の手前には「御床几場」の文字が書き込まれている（図2参照）。

床几とは移動用の折畳式簡易腰掛けのことである。藩主の姿は描かれてないが、「御床几」とある点からみて、この時、徳島藩主がわざわざここに座り、松林の勝景を見たことを示す⁽⁵⁾。時代が降っても、慶野松原が支配者による国見に相応しいところであったことがわかる。



図2 『淡州御道筋処々真景』（松林の手前に「御床几場」と記される）
山本博司氏蔵

（2）聖なる場所としての砂嘴（砂堆）

このように松林が生える砂嘴・砂州の景観は、国見の対象であったが、それとともに古代の海人たちの神祭りと、それに付随する歌垣が開かれる場所でもあった⁽⁶⁾。そもそも松の樹は、「神を待つ木」などといわれるように、神の依り代となる樹木である。『万葉集』には、松に関する歌が合わせて77首載せられているが⁽⁷⁾、そこには手向けや枝結びの慣習など、松が聖木であることを示す歌が多く詠まれている。

また『摂津国風土記』逸文によると、大阪湾岸の「比売島松原」「美奴売松原」「神前松原」などは、神の鎮座地あるいは神々を迎え入れる場であるという伝承が残されている（『万

葉集註釈』巻2、3)。このうち美奴売松原は、現在の神戸市兵庫区の和田岬あたりの松林であり、そこには摂津国八部郡の式内社として「汶売神社」があった。白砂青松の浜辺は「見る」対象だけではなく、地域の人びとの信仰の場にもなった。

とくに和田岬のように砂嘴が海に向かって凸状に突き出し、しかも松林がつづくような場所は、海の神が憑依したり、宿るところと見なされていた。飼飯における3つの砂嘴も、まさに松林をともなう凸状の構造になっていた。この付近の海人がここを聖地として扱っていたであろう。

これに関連して留意したいのは、慶野松原の砂嘴上の松帆地区では、古津路銅剣や松帆銅鐸が見つかった事実である。この点について考古学研究者の定松佳重氏は、慶野松原の海岸部は、青銅製の祭器を埋納する「特別な場所」と見なされていたと指摘する⁽⁸⁾。

この見方はすでに弥生時代から、ここが神聖視されていたことを示唆する。また弥生時代に銅鐸が大量に埋められた場所の多くが、後世「神岡」（桜ヶ丘）「神庭」（荒神谷）「加茂岩倉」など、神や神祭りに関わる地名を帯びる事実も参照になる⁽⁹⁾。慶野松原が広がる砂嘴上も、神祇祭祀の開催場所として尊ばれていたとみられる。また次節で述べるように、古代の「ケヒ」（飼飯・気比）という地名そのものも、ある特定の神霊が鎮座することに由来していた。

おそらく飼飯の海人たちは、大潮の日などに当地に集まり、まず族長層がつかさどる厳粛な祈りの神事に参加した。ついで酒食の共同飲食が始まり場が和みだすと、男女間の性的解放行事の歌垣（神遊び）もおこなわれた。この点は『常陸国風土記』香島郡の「童子松原」や、『出雲国風土記』島根郡の「前原崎」などの地名起源説話によって明らかである。

このように直接的な関連史料は見あたらないが、古代の慶野松原は、海人系氏族の族長層などによって「見る」対象、また彼らを取り仕切る厳粛な神事、そして老若男女による歌垣が開かれるところ、すなわち「祭り」「遊ぶ」空間であったことをうかがえる。

これらの点を指摘したうえで、次節では飼飯の海人に関わる柿本人麻呂の歌と、それに関連する諸史料を素材にして、当地の海人が、倭王権によってどのように編成される集団であったかを考察してみよう。

2. 天皇の「国見」行幸と飼飯の海人による服属奉仕

（1）柿本人麻呂の「羈旅歌八首」

前節で紹介した飼飯の海人に関する柿本人麻呂の歌は、『万葉集』巻3の249～256に、「羈旅歌八首」として一括される歌の1つである。羈旅とは旅のことであり、羈旅歌は旅の途中の景観、家人への思い、旅情などを詠んだものである。8首のすべての歌には、大阪湾岸から播磨灘にかけての地名がみられる。順番に「（住吉）三津の崎」（249）、「（摂津）敏馬」（250）、「（淡路）野島の崎」（251）、「（播磨）藤江の浦」（252）、「（播磨）賀古の島」（253）、「（播磨）明石の門」（254、255）、そして最後に「（淡路）飼飯の海」（256）が登場している。

これらは下級官人としての人麻呂が、官命を受けて都鄙間を往復した際の旅の歌と解釈されている。地名のあり方から、一般に「瀬戸内海の旅の歌」と呼ばれてきた⁽¹⁰⁾。しかし多田一臣氏が指摘するように、8首の制作年次は不明であり、すべて同一時の旅の歌とは限らない。また西行、東行の歌が混在し、経過地点にも不審な点がみられる。何回かの

瀬戸内海の旅の歌を、ここにまとめた可能性が高い。しかしそれが人麻呂自身の手によるかもわからないという⁽¹¹⁾。

(2) 『万葉集』の行幸^{じゅうが}従^{じゅうが}駕^がの歌

この多田説を受けて筆者は、8首は当然人麻呂の作とみるが、それを「羈旅歌」として一括りにしたのは、『万葉集』の編者であって、そこには単なる旅の歌でないものも含まれていると考える。というのも252に「荒たへの 藤江の浦に すずき釣る 海人」の姿を見た際の歌、また飼飯に関する256では「出漁する海人の釣り船」の歌など、それぞれの土地の海人が働く様子を見た時の歌も詠み込まれているからである。

『万葉集』における「見る」歌のあり方を分析した吉井巖氏は、こうした働く海人の姿を見る歌の前提には、もともと行幸先の天皇が、彼らを見る服属儀礼があったと説く。その際、ある歌人が、彼らの働き振りを見て詠むことは、天皇讃美につながったという。そして氏は「盛んな海人の仕事振りは、さかんな国の力の発現である。だから支配者である天皇が行幸先での見る儀礼において、見る対象の中に海人の作業等を加えていた」⁽¹²⁾と指摘した。つまり吉井説においては、創作された「旅の歌」(羈旅歌)は、そもそも行幸時の天皇讃美の歌から分化・独立したものと理解されている。

また聖武天皇による神亀2年(725)の難波行幸や、同3年の(播磨)^{いなみの}印南野行幸時の山部赤人の歌を考察した土橋寛氏によると、この行幸に従駕した赤人は、前述の野島の海人が漁撈に仕えることを歌い(巻6-933)、また藤井の浦の海人が^{しび}鮎を釣り、塩を焼く生業の有様(巻6-938)を歌っていると述べる。そのうえでこれらは、海人が天皇に奉仕する姿であり、これを詠むことは、やはりその様子を実際に「見た」天皇を誉め称えることを意味すると説いた⁽¹³⁾。

さらに同じく上の山部赤人の行幸従駕歌を考察した鈴木崇大氏は、天皇行幸に従った宮廷歌人に与えられた主題は王権の讃美にほかならず、彼らは服属の証しとして^{にえ}贅^{つき}や^み調を御食(天皇の食事)として貢納する海人の様子をさかんに詠み込んだと指摘する⁽¹⁴⁾。

これらにもとづく「羈旅歌八首」のうち、少なくとも藤江の浦と飼飯の海人の歌は、人麻呂が行幸に従った時、彼らが服属・奉仕する様子を詠み上げた天皇讃美の歌として理解できる余地がある。つまり『万葉集』の「見る」歌のなかには、自然の景色などのモノだけではなく、天皇に仕えるヒトの姿も含まれていた。

(3) 柿本人麻呂による行幸従駕の歌

柿本人麻呂は、「大君は 神にしいませば 天雲^{いかづち}の雷の上に 廬^{いほ}りせるかも」(巻3-235)という歌が、太平洋戦争時の「愛国百人一首」の冒頭に配されるほど⁽¹⁵⁾、天皇讃美を惜しまない歌人であった。実際、彼は持統天皇の行幸時などにいくつかの歌を詠んでいる。

たとえば持統4年(690)～5年の吉野行幸時の長歌では、天皇が国見した吉野の勝景を愛でるとともに、「やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせすと 吉野川^{たぎ} 激つ河内に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見をせせば たたなはる 青垣山^{やまつみ} 山神^{まつ}の 奉^{まつ}る御調^{みつき}と…行き沿ふ 川^{おみけ}の神も 大御食に 仕へ奉ると…」(巻1-38)と歌っている。

ここでは国見した天皇に対して、単なる人だけでなく、山の神や川の神が「御調」や「大

御食」を貢納・奉仕する姿を描いている。まさに山川の神をも従えて統治する、持統天皇の偉大さが称賛されている。このほか持統6年(692)3月の伊勢・志摩行幸時、軽皇子(後の文武天皇)の宇陀・安騎野行幸時にも、天皇や王権を讃美する歌を数多く作っている。このうち伊勢・志摩行幸時の歌は、「留_レ京三首」(巻1-40～42)であった。

とすれば飼飯の海人の労働を詠んだ人麻呂の歌は、どの天皇の何処への行幸時に作られたのであろうか。これをみる際にまず確認すべきは、当時の行幸のあり方についてである。

(4) 古代の行幸と服属儀礼

従来の研究成果によると、古代の行幸は基本的に「国見」「国誉め」「狩獵」「征旅」「服属儀礼」の5つから成り立っていたという⁽¹⁶⁾。このうち服属儀礼の具体的内容としては、各地の風俗歌舞や「国形」(地名起源説話)の奏上のほか、しばしば海人による食物供献がおこなわれていた。しかも留意すべき点は、食物供献の儀礼が、行幸先の当国の者だけに限らず、その近隣諸国の集団によっても担われていた事実である。

たとえば先の持統6年(692)3月の伊勢・志摩行幸に関連して、『日本書紀』の同年5月庚午条には、「御_レ阿胡行宮_ニ時、進_レ贅者紀伊国牟婁郡人阿古志海部河瀬麻呂等兄弟三戸、服_ニ十年調役・雑徭_ニ。復免_ニ挾抄八人今年調役_ニ」とある。ここでは約2月前、志摩国の阿胡(英虞)の行宮に「贅」を貢納した、紀伊国牟婁郡の「阿古志海部」ら兄弟3戸の10年分の調役と雑徭を免除する処置がとられた。それとともに挾抄8人の当年の調役も免じられている。これからみて彼らは実際に舟に乗り、牟婁郡から熊野灘を経て、英虞湾まで贅を天皇のもとに運んだとみられる⁽¹⁷⁾。これは行幸先の隣国海人による服属儀礼の事例の1つである。

また神亀2年(725)の聖武天皇の難波行幸の時には、前述のように野島の海人がわざわざ「舟並めて」淡路島から難波に来て、「御食つ国 日の御調」として鰺珠(鮑貝)を天皇に貢納していた(『万葉集』巻6-933長歌)。山部赤人はこの様子を反歌において、「朝風に 楫の音聞こゆ 御食つ国 野島の海人の 舟にしあるらし」(巻6-934)と歌っている。当時の野島の海人は、約50キロ近くも離れた聖武天皇の難波の行宮に鰺玉を届けたのであった。さらに時代は降るが、桓武天皇の延暦23年(804)10月の和泉・紀伊行幸に際しては、摂津・阿波・河内国の献物のほか、10月10日には播磨国司が日根野の行宮に献物し、合わせて「風俗歌」を奏上している(『日本後紀』同年10月辛亥条)。

こうしてみると飼飯の海人も、淡路の隣国へ行幸があった時、その行宮に向けて食物供献に従事した可能性が強い。人麻呂はその様子をどの時点の行幸で見て、先の歌を詠んだのであろうか。彼が活躍した時代と地理的關係を考慮して残存史料に眼をやると、それはつぎに示す3つの行幸時であったと想定される。すなわち前述の持統4年(690)9月の紀伊行幸、文武3年(699)正月～2月の難波行幸、および大宝元年(701)9月～10月の紀伊行幸(武漏温泉を含む)の時である。

このうちもっとも有力な候補は、大宝元年の紀伊行幸時である。なぜならこの行幸は、文武天皇とともに持統太上天皇も同行する、約1ヶ月間におよぶ大規模なものであった。『万葉集』にはその時、各地で海人が労働する姿を詠んだ歌が多く残されているからである。たとえば「鹿島なる 釣する海人を 見て帰り来む」「湯羅の崎 釣する海人を 見て帰り来む」(巻9-1669、1670。作者不明)などがそれである。しかもこれらの歌は『人

麻呂歌集』から収録したものと推定されている（巻 2-146 題詞も参照）。

いずれの行幸であるにせよ、人麻呂による巻 3-256 の歌は、単なる旅の途中の歌ではなかった。飼飯の海人らが、行幸先の天皇に奉仕した様を描いた天皇讃美の歌の 1 つであった。飼飯の海人の活動や、王権への日常的な編成のされ方については、国史などの記録にまったく見あたらない。しかし彼らは少なくとも隣国への行幸時に奉仕させられる場合があった。

古代の大阪湾岸から淡路島にかけて点在する海人の編成のあり方は、王権への舟運力や水軍兵力として動員、明石海峡など海の難所の水先案内人、塩や清浄水の貢納、個別王宮への名代としての組織など、さまざまな形態があった⁽¹⁸⁾。このうち飼飯の海人については、巻 3-256 の人麻呂の歌で、「飼飯の海 庭良くあらし」と、漁場の良さが詠まれている。

これからみて彼らは、基本的には魚介類を中心とする海産物の貢納集団として位置づけられていた可能性が高い。この飼飯の海人＝海産物の貢納集団という編成のされ方に関連して、最後に「ケヒ」（飼飯・気比）という地名の問題にも眼を向けてみよう。

（5）「ケヒ」の地名と飼飯の海人

ケヒという地名は各地にみられ、兵庫県内では淡路国三原郡のほか、但馬国城崎郡の由良川河口部の右岸にも存在する。ここは淡路島の慶野松原と同じく、弥生時代中期の銅鐸が見つかったことで知られる。しかもその対岸には日本海側の海人集団、但馬海直氏が奉斎した式内社、海神社（名神大）があった。

しかしこれ以上に留意したいのは、多くの海人集団が住まい、また日本三大松原の 1 つの「気比松原」（国の名勝）がある、越前国敦賀郡の「気比」（筥飯）の地名である。気比松原の砂堆上には、式内社の「気比神社七座」（名神大）があり、また『古事記』中巻・仲哀天皇段には、気比の地名の起源説話が記されている。

それによると建内宿禰が太子（後の応神天皇）とともに角鹿（敦賀）に来た時、当社の伊奢沙和気大神が、名換えの御礼として、太子に御食の魚（入鹿魚）を提供した。それに因み、「称其御名、号御食津大神。故、於今、謂気比大神」と説かれている。

これはあくまで後付けの説話であるが、気比の地名のいわれを天皇の御食に結びつけている点が興味深い。この話を分析した三品彰英氏は、「気比」の「ケ」は食物、「ヒ」は霊力を示し、「ケヒ」は「食霊」をあらわすと説いた⁽¹⁹⁾。『日本書紀』の神代（上）に、「高皇産霊」や「火産霊」などの神名がみえるので、妥当な解釈といえる。また吉野の山川の神々が、「大御食」を奉るという先の人麻呂の長歌（巻 1-38）にもとづけば、気比大神が「御食」を捧げる神だと見なす考えが出てきても不思議ではない。

これらを踏まえれば淡路島の「飼飯」（気比）の地名も、天皇に御食を供献する「食霊」の神がいるところを意味することになる。こう名づけられた理由の 1 つは、当地にも敦賀のケースと同じく、白砂青松の浜辺（後の慶野松原）が存在し（図 3 参照）、前節で述べたように、そこは神が宿る場所と認識されていたことが大きい。しかしより決定的に重要なのは、この近くには、豊かな海の幸を、実際に御食として献上する飼飯の海人がいた事実である。飼飯の海人はいわば食霊の神に代って、日々獲得した海産物を御食として貢納するとともに、天皇の隣国行幸時には、場合によってそれを可視的に確認する服属儀礼への参加が義務づけられた集団であったと理解できるだろう。

おわりに

以上、2 節にわたり検討を重ねてきた。まず第 1 節では、本プロジェクトのテーマ「「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観」と関連づけて、3 つの砂堆（砂嘴）上に広がる「慶野松原」が、地元の海人の「見る」「祭る」「遊ぶ」景観であることを述べた。またこうした美しい光景が形成される前提の 1 つとして、「鳴門の渦潮」を生成する淡路島沿岸部の強い潮流が影響を与えていたことも確認した。

また第 2 節では、『万葉集』における柿本人麻呂の「飼飯の海人」が働く姿を詠んだ歌を出発点にして、彼らが日常的には漁撈で得られた海産物を天皇の御食として貢納する集団として編成されていたこと、また天皇の隣国行幸時には、それを可視的に確認する服属儀礼に参加させられる場合もあったことを述べた。さらに『古事記』の越前国の気比大神をめぐり地名起源説話にもとづくと、いわばそれは「食^け霊^ひ」の神に代って、天皇・王権へ服属・奉仕する行為と見なされていた点などを指摘した。

「鳴門の渦潮」の文化的価値を考える場合、その周辺地域におけるかつての景観認識、人びとの生業・習俗のあり方、あるいはそれをめぐる各時代の政治との関わりにも眼を向ける必要がある。



図 3 上空から見た慶野松原
南あわじ市埋蔵文化財調査事務所提供

注

- (1) 加藤茂弘「淡路島の地形と地質 - 砂嘴・砂州の形成と神話との関わりの背景」(「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会編『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化遺産』同委員会、2023)。
- (2) 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所編『松帆銅鐸調査報告書Ⅱ』(南あわじ市教育委員会、2021)、22～26頁。
- (3) 土橋『古代歌謡と儀礼の研究』(岩波書店、1965)、266頁。
- (4) 拙稿「地名の由来に託された服従の証し - 賀毛郡伎須美野の伝承 -」(兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室編『播磨国風土記』の古代史』神戸新聞総合出版センター、2021)。
- (5) なおこの時の徳島藩主による巡見の出迎えと案内役をつとめた三原郡立川瀬村の庄屋、8代目・矢野甚右衛門の日記、『晴雨諸要用之品』の文化14年3月17日条には、「晴天。今日慶野村ノ松原御覧」とある(兵庫県立歴史博物館蔵『淡路国三原郡立川瀬村矢野家文書』箱2-17-2)。これによると慶野松原の国見が実際におこなわれ、それは3月のことだったことがわかる。この史料の存在については、竹内信氏のご教示を得た。
- (6) 拙稿「古代国家とミナトの神祭り」(『日本古代国家の農民規範と地域社会』思文閣出版、2016。初出は2003)。
- (7) 有岡利幸『松と日本人』(人文書院、1993)。
- (8) 定松「淡路島の青銅祭器の動向について」(『地方史研究』430、2024)。
- (9) 佐原真『歴史発掘⑧ 祭りのカネ銅鐸』(講談社、1996)。
- (10) 神野志隆光「羈旅歌八首をめぐって」(同『柿本人麻呂研究』塙書房、1992。初出は1978)。
- (11) 多田『人物叢書新装版 柿本人麻呂』(吉川弘文館、2017)第六章。
- (12) 吉井「見る歌の発想形式について - 「見ゆ」を中心に -」(同『万葉集への視角』和泉書院、1990。初出は1962)、255頁。なお吉井氏のこの捉え方は、歴史学者の関和彦氏も継承している(同「見る」と日常性・天皇制』『日本古代社会生活史の研究』校倉書房、1994。初出は1986)。
- (13) 土橋注(3)前掲書、298頁。
- (14) 鈴木「山部赤人の神亀二年難波行幸従駕歌」(『東京大学国文学論集』91-16、2014)。
- (15) 多田注(11)前掲書、5頁。
- (16) 仁藤敦史「古代国家における都城と行幸 - 「動く王」から「動かない王」への変質 -」(『歴史学研究』613、1990)。
- (17) 市大樹「御食国志摩の荷札と大伴家持の作歌」(神野志隆光・芳賀紀雄編『万葉集研究』33、塙書房、2012)。
- (18) 拙稿「「国生み」神話と海人の習俗」(『ひょうご歴史研究室紀要』3、2018)、拙稿「古代の大阪湾岸・淡路島の海人の生業と習俗 - 『古事記』の「槁根津日子」伝承を素材にして -」(同上5、2020)、古市晃「淡路宮伝承とその原史料」(中尾芳治編『難波宮と古代都城』同成社、2020)など。
- (19) 三品「応神天皇と神功皇后」(『三品彰英論文集4 増補日鮮神話伝説の研究』平凡社、1972)、120頁。